

## 主日礼拝

2023年11月5日(日)

題 「イエスとニコデモ」

テキスト：ヨハネによる福音書3章1～15節

皆さま、おはようございます。

今日の宣教の題は「小見出し」の通り、「イエスとニコデモ」とつけました。

1節、2節を読みますと、

1:さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。

2:ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。」と言います。ニコデモは、今からおよそ2000年前のイエスさまの時代、ユダヤ人で構成されたエルサレムの町の議会の議員のひとりでした。この議会はサンヘドリンと呼ばれます。

この議会は大祭司を議長として、サイドカイ派と呼ばれた祭司などを中心とするグループとファリサイ派と呼ばれる律法学者と呼ばれるグループから構成されていました。ニコデモはファリサイ派に属しており、人々から尊敬されていたようです。彼はこの後、イエスが十字架につけられ処刑された後に、イエスの弟子のヨセフと共に、イエスの遺体を引き取って埋葬しました。(ヨハネ19章39節、P208)。今日に個所では、ニコデモは、イエスと話がしたくて、ある夜、ひそかにイエスもとを訪ねたのです。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」とイエスに対して敬意をこめて語ります。ラビとは、当時の言葉ヘブライ語で「先生」という意味です。彼は、イエスの語ることばと病人を癒される業などに心を動かされていたのだと思われます。だれからも気づかれないようにして、夜イエスを訪問したのです。そして「神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」と言いました。ここからイエスとニコデモの会話が始まります。

3:イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

「はっきり言うておく。」ということばは、「アーメン」という言葉で確信を持った言い方です。聖書では大切なことを言う時に用いられます。

また「新たに生まれなければ」とは、「上から生まれなければ」「神から生ま

れなければ」という意味です。イエスが言われる「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」とは、人間は生まれた状態の自然のままでは、神の国を見ることはできない、神を知り、理解することはできないのだ、ということだと思われます。ニコデモはイエスの語る言葉の意味が理解できませんでした。ですからニコデモは、

4:「年をとった者が、どうして生まれることができますしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるのでしょうか。」と言ったのです。

「年をとった者」、彼はすでに老人の域に入っていたようです。ニコデモは自分を年をとった者と受けとめ現実的な見方をする人でしたが、年齢に支配され、そこから自由となることはできなかつたようです。ですから、突然のイエスからの問いかけに驚いたのかもしれませんが。現在生きている私たちにも当てはまることがあるかもしれません。

人は、今ままで聞いたことのあること、または経験したことしか理解できないのではないか、ということです。ニコデモは、イエスの言葉の意味が分からず、会話はすれ違うだけでした。しかし、イエスは夜、人目を避けるかのようにして、ひそかに自分を訪ねて来た、ニコデモに対して、真剣に向き合われたのです。いわば神の国問答のようです。イエスは言います。

「5:イエスはお答えになった。「はっきり言うておく。だれでも水と霊から生まれなければ、神の国に入ることはできない。」

6:肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

7:『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。

イエスはニコデモの今までの人生を否定するのではなく、また今まで過ごして得て来た経験、知識や知恵などなど、喜びや悲しみを軽く見るのでもなく。ニコデモ一人のことではなく、年齢や性差にも関係なく、「あなたがたは新たに生まれねばならない」と言われるのです。そして口を開き、今までニコデモが聞いたことがないであろう新しいことを語られたのです。

「 8:風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

「風」という言葉に、天と地の創造者なる神の力と自由を思います。事実、「霊」ということばのヘブライ語の原語はルーアツハと言われ、その意味は「風」であり、「息」「いのちの息」なのです。イエス・キリストに出会って生きるものは、神の自由と命の息に預かりながらこの世をきているのです。この世界にあって、それぞれの限界を持ちながらも、神の息吹、神からの風を受けて、限界を超えて生きて行けるのです。イエス・キリストと共に、神と共

に生きて行くのです。生きて行けるのです。自分の年齢や住んでる地域に住みながらも、制限されることのない、自由なる神と共に生きることができるのです。御子イエス・キリストにあって神さまがそのように生かしてくださるので。これこそがイエス・キリストの地上に歩みにおいて、十字架の死と復活の命によって与えてくださった生き方だと言ってよいのです。ニコデモは、多くの経験もあり、旧約聖書の知識のあるにもかかわらず、まだ理解できなかったのです。二人のやり取りが続いています。

9:するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。

10:イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。

11:はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。

12:わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。

13:天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもいない。

神の子イエス・キリストがこの世に来られた時代に生きている人は、わたしたちを含めて、何と幸いなことでしょうか。聖霊の働きによって、永遠のいのちへの門がすでに開かれている時代を生きているからです。「はっきり言うておく。だれでも水と霊から生まれなければ、神の国に入ることはできない。」洗礼を受けるということは、神の思いなしには実現しないのです。洗礼を受けたということは、水と霊から生まれさせられ、神の国に入る入口にいるということではないかと思えます。この世を生きながら、すでに神の国、神の愛の支配する国に入れられていると思えることはいかに幸いなことでしょうか。イエスは神の救いを教えるために旧約聖書の古事を伝えます。旧約聖書の民数記という書物にある出来事です。

14:そして、モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられね

ばならない。「モーセが荒れ野で蛇を上げたように」とは、民数記21章8節～9節(p249)に記された出来事です。それは神が、イスラエルの民がエジプトでの奴隷状態から神の助けにより、脱出して旅を続ける中で民は、苦しみに耐えかねて、神と指導者モーセに不平を言いました。「なぜ、我々をエジプトから導き上ったのですか。荒れ野で死なせるためですか。パンも水もなく、こんな粗末な食物では、気力もうせてしまいます。」と。主は炎の蛇を民に向

かって送られた。蛇は民をかみ、イスラエルの中から多くの死者が出た。そこで民はモーセの所に来て、「わたしたちは主とあなたを非難して、罪をおかしました。主に祈って、わたしたちから蛇を取り除いてください。」と頼みます。モーセは民のために主

神に切に祈ります。モーセは祈りの人でした。民の犯した罪を自ら担うかのように民の救いを祈る人なのです。主はモーセに「あなたは炎の蛇を造り、旗竿の先に掲げよ。蛇にかまれた者がそれを見上げれば、命を得る。」モーセは青銅で一つの蛇を造り、旗竿の先に掲げた。蛇が人をかんでも、その人が青銅の蛇を仰ぐと、命を得た。」という出来事が記されています。

この出来事は、時を経てイエス・キリストのゴルゴタの丘での十字架の死と、そのイエスの死を自分にかかわることとして見上げる者たちにとっては救いなのです。民が救われることの予型、あらかじめの罪から救われること、自由と命を表す出来事となっているのです。

15:それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。イエスの十字架、わがためになり、と信じる者たちにとっての救いなのです。今は、神の子イエス・キリストが来られて、今人間の罪が明らかになり、救いが明らかになった時代に入っているのです。現実はいかに厳しくとも、イエスにある希望はあるということです。イエスにあって信仰と希望と愛はあるのです。

「イエスとニコデモ」の出会い、神が与えられた救いの出会いであったのです。わたしたちも、あるがままで、イエスにすぎるとき、神の救いの中に生かされ生きるという道が開かれているのです。「15:それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。」 人生の悩みや苦難の中にあっても、主イエス・キリストを思い、憐み深い神さまへの感謝と賛美を捧げて生きて行きたいと願います。